

4ヵ月にわたるバウム表現シリーズの変動について

佐 渡 忠 洋

心身マネジメント学科

Examination of Individual Variability in Width of Baum Test Drawings Over a Four-Month Period

Tadahiro SADO

要 旨

本稿の目的は、バウム表現シリーズの分析を通じて、バウム表現の幅に関する個別の変動を評価し、この変動性の臨床的意味を検討することである。対象者は2名の女子大学生であり、4ヵ月間にバウムテスト2枚法を計6回実施した後、ロールシャッハ法を実施し、さらにバウム表現をテーマとした半構造化面接を行った。4ヵ月間のバウム表現の個々の変動性、ロールシャッハテスト、および半構造化インタビューの結果を分析した結果、次の4点が見出された。1) 個人が表現するバウム像の幅には限界があり、さまざまな表現を行っても個性は一貫して認められる。2) 他技法と同じくバウムもシリーズとして理解することが重要である。3) 治療場面においてシリーズとして捉える時、セラピストは個人的変動（表現が変わることと変わらないこと）の影響を慎重に検討すべきである。4) 指標と理解できる表現の有無という観点からのみでは、バウムを十分理解することができない。

キーワード：バウムテスト、シリーズ、変動性、幅

Abstract

The purpose of this study is to assess individual variability in the width of Baum Test drawings, and to determine the clinical implications of this variability. Participants were two female university students. The Baum test was administered to participants six times over a four-month period. Then, the Rorschach's Inkblot Method, as well as a semi-structured interview along the theme of the Baum test were administered on the participants. Individual variability in Baum test drawings over the four-month period was assessed, and results of the Baum tests, Rorschach's Inkblot Method, and semi-structured interviews were analyzed. After analysis, it was determined that: 1) Limited individual variability was seen in width of Baum test drawings, with consistent individuality in the drawings; 2) As with other therapeutic/projective methods, it is important to interpret Baum test drawings as a series; 3) In a clinical setting, the therapist should carefully consider the implications of individual variability (changing and unchanging) in Baum test drawings; and 4) A Baum test drawing cannot be fully interpreted based on the presence of indicators alone.

Keywords : Baum test, series, individual variability, width

1. はじめに

バウムテストは通常、「枝がある」や「根が認められる」という見かたで解釈されるようである。もう少し詳しく言えば、「この枝先だけ開いている」や「包冠線も葉もなく、バウム（描かれた木）上部は曝されたかのような状態にある」などといった着目の仕方を読まれる。つまり、ある表現形式の有無から解釈の道筋が立てられる傾向をもつ。少なくとも、先行研究の大半はこの論理を支えるために行われたか、この論理に基づいて行われてきた。しかし、周知のごとく、ある具体的な表現形式（これを共有可能にしたものが「指標」と呼ばれるべきだが、共有不可能なものも多い）を認識することで描き手を理解しようとするアプローチには限界がある。

筆者はこれまで、様々な条件を設定し、同一対象者に対して2度のバウムテストを実施する調査研究に取り組んできた（佐渡，2019など）。それはバウムという描画の主題それ自体の特徴を理解することを目的としていた。これはすなわち、先に記したような、表現形式の有無からバウムを読もうとするだけではなく、描き手の描画体験も視野に入れ、「ゆらぎ」という観点から議論する試みであった。ここには2つの主張が含まれている。第一は、バウム表現可能性の幅と表現しうるものが個人にあるとするならば、得られた1枚のバウムを部分的表現の「有無」だけで云々論じることには無理がある、ということ。第二は、指標の意味を探索したり、特定の群に認められやすい表現を検証したりする取り組みと同じくらい、バウムの変動性（どこが・どれほど変わりやすいのか／にくいのか）についての枠組みをある程度把握する研究は肝要であろうということ。これまでの検討により、この部分については一定の知見を得ることができた。それでも、個人に潜み、かつ現出もする表現に配慮するならば、あるいは、バウムに表現されたこと／されなかったことの両面に配慮するならば、バウムという主題を更に知ることが必要になる。そのためには、個別の事例を詳細に検討する方法が適当であろう。

この方面で有意義な報告は、「毎回その日に描きたいと思ったバウムを描いた」という奥田（2019）の研究である。彼は自らが描いた100枚の日誌的バウムを提示・検討しており、一個人から多種多様なバウムが生まれること、各バウムイメージは現実場面との函数で現れることを示した。筆者が知る限り、この報告以外に、個人のバウム表現のシリーズを得て理解しようとする取り組みはない。

そこで本研究では、協力が得られた女子大学生2名に対して、4ヵ月間にバウムテスト2枚法を縦断的に計6回実施した結果を吟味し、個人のバウム表現の変動性（変化すること／しないこと）の意味を考える。

2. 調 査

2.1 対象者

東海地区の国立大学に在籍する女子大学生2名。ともに調査協力を打診し、同意を得た者である。調査の説明を行った時、対象者らには最後に謝礼を渡すことも伝えた。

2.2 手続き

調査は201X年に、原則3週間隔で、バウムテスト2枚法を個別に、計6回実施した（毎回、対象者と筆者との合議で次回の実施日時を決定した）。バウムテストはA4判画用紙と4B鉛筆を使用し、教示「実のなる木を描いてください」で実施した。続いて2枚目は、特に説明も加えずに「もう1枚、実のなる木を描いて下さい」の教示で描画を求めた。また、6回の調査後、別日にロールシャッハ法（Rorschach's Inkblot Method：RIM）を片口式旧法で施行した。

RIMの後日、計12枚のバウムをめぐっての振り返り面接を行い、各回のバウムを順に提示しながら、対象者の考え・連想を尋ねた。この際、筆者からはくこの時はどうでしたか>など、水を向ける程度の介入に留め、方向づけを行う質問は積極的に行わず、対象者が語るに任せた。

対象者には調査前に、概ね3週間間隔で計6回絵を描いてもらうこと、その後で2度の面接（RIMと振り返り面接のこと）を行うことを伝えてあった。

2.3 分 析

対象者2名の表現シリーズはそれぞれ、回ごとに提示する。つまり、バウム描画の記録の後に、それらについての振り返り面接の語り（斜体で示す）が続く。調査の回数は「#」で表す。対象者の発言は「」で、筆者の発言はく>で表す。

2名の表現シリーズを個別に検討した後、最後にバウム表現が変化すること／しないことの意味を考察する。

2.4 倫理的配慮

本調査全体を通じて、対象者の内的課題には触れないよう配慮をした。また、本研究は名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会の承認を得た（No.24-017）。対象者らからは書面での同意を得た。

3. 対象者 A の表現シリーズ

3.1 バウムと振り返り面接

Aは女性、大学4年生（21歳）。体格は150cm後半で中肉。初見から淡い色の服を着ることが多かった。筆者の第一印象は、個性的な人、というものだった。

Aが描いた全バウムが図1である。回ごとのバウム表

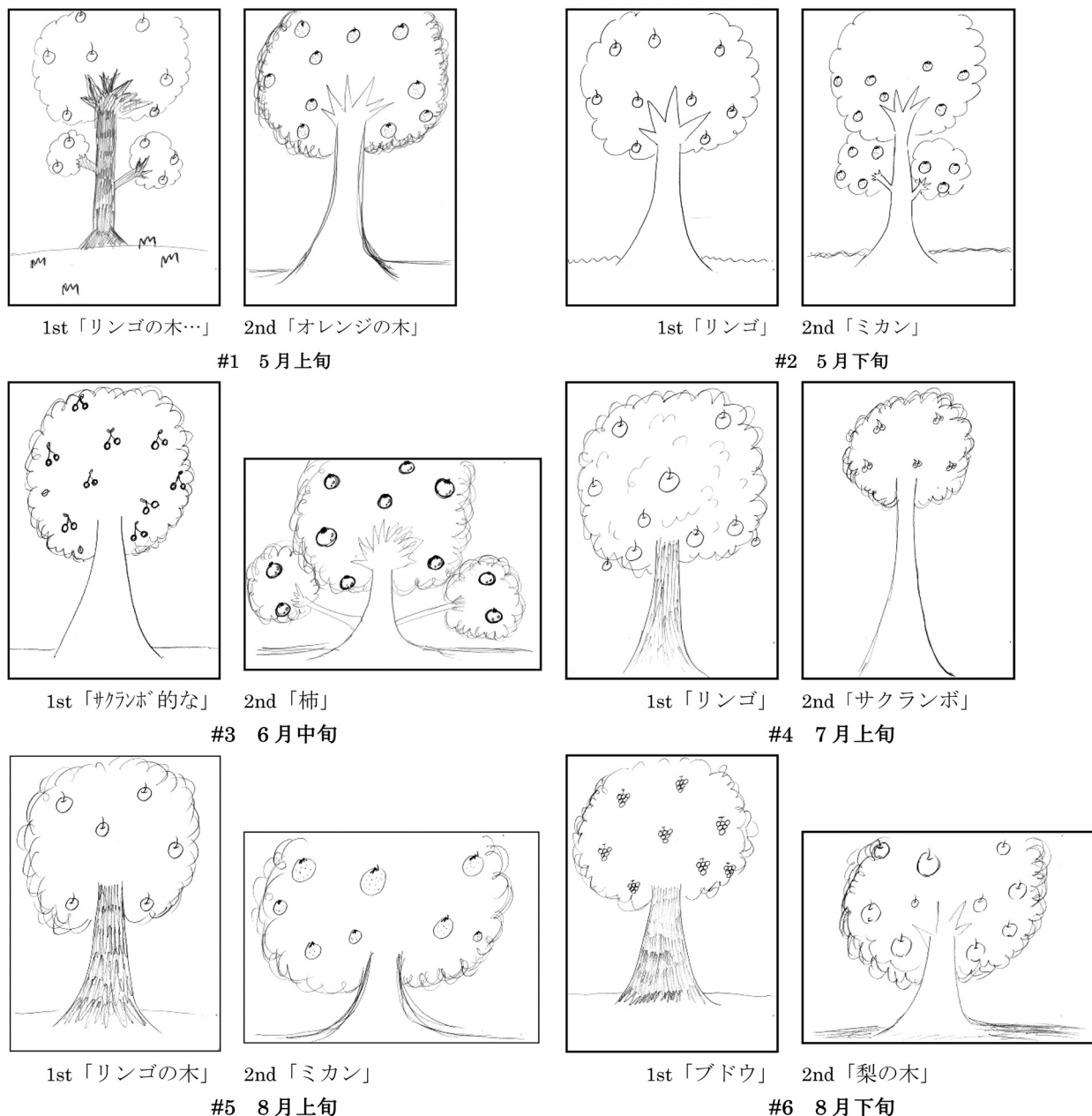


図1 Aのバウム・シリーズ

現（5～8月）と、それに対する振り返り面接（10月）は、以下の通りである。

【#1】 201X年5月上旬。1枚目は幹線を左・右の順で下ろし、右・左と枝をつけてからさらに幹を上へと伸ばす。幹頂部を分化（幹からの枝分かれ）させ、それを包冠線（樹冠の外輪郭線）で左から覆う。低在枝にも葉むらを描いて実をつける。幹を暗くし、枝にも色付けた後に、幹の根元を広げ、地面線を描く。バウムの周囲に草も描いた。筆は早いが、雑な印象は受けない。樹種については「リンゴの木…」と語る（A1-1）。2枚目の時は、上部から幹線を左・右で下ろし、幹上部の分化を行ってから包冠線を加え、実を描く。包冠線の描線を重

ね、地面線を描く。バウム全姿を描き終わった後、一度手が止まってから、樹冠の輪郭を何度か重ねて描く。「オレンジの木」（A1-2）。

【面接】 「4年生になってから、未来が見えなくなってしまうがなかったので。今見ると雑だなぁという印象があるんです。もうちょっと上手く描けないかなって。」 <…4年になってから？> 「やっぱり進路のことで。大学院に行きたいなって思ってた、でも親に大反対されて、それですと〔親と〕疎遠になっているので。なんかずっとフワフワしてるので。…ていうのが〔バウムに〕出てるのか分からないんですけど、あんまり元気な木じゃないイメージが。」

【#2】 5月下旬。#1よりも筆のスピードはゆっくり。1枚目は、幹線を左・右を下ろし、包冠線を左から描いた後で、幹頂部の分化を行う。実は丁寧に描いているという印象。最後は両側の地面線を左から描く。「リンゴ」(A2-1)。2枚目は、幹線を左・右で下ろし、もう一度幹線を足して下に伸ばしてから、両側の低在枝(樹冠の下にある枝)を描く。幹を2回に分けて上へと伸ばし、枝分かれさせる。幹頂部と低在枝に包冠線を加え、地面線を重ねて描く。最後に実をつける。「ミカン」(A2-2)。

【面接】 「卒論の構想発表会が近くなってきてたので、慌ててたっていうのもあるんですけど、第一志望の〇〇(就活の職種)が落ちてしまった。だからなんか、忙しかったかなって感じがします。でもさっきよりもマシなのかなっていう。なんかこれ(幹上部の枝分かれを指し)を描くと手に見えちゃって。手が生える感じ、でも描いちゃうっていう。で、“実のなる木”じゃないですか。いつもリンゴじゃ芸がないなって思ってた。なんか他に果実系で実がないかなって考えました。」

【#3】 6月中旬。1枚目は、幹線を左・右と下ろし、少し考えてから包冠線を左から描く。何度か樹冠に筆を加えてから、実を丁寧に描き入れる。最後に地面線。「サクラランボ的な」(A3-1)。2枚目を描く時、「縦じゃないと、横でもいいですか?」、<自由にしていただいて…。用紙を横長にし、幹線を左・右と下ろし、包冠線を左から描く。幹頂部を分化させ、実を濃く描く。幹下部を広げて、地面線を加えた後で、左・右の順で低在枝と樹冠を描き、さらにそこに実も加える。「柿です」(A3-2)。

【面接】 「たぶん、ここ(#2)とここ(#3)の違いは、親と大喧嘩しちゃって。それからずっと喧嘩中なんですけど。それからずっとモヤモヤしてます。あと、リンゴに飽きてきたと思うんですけど。」「あと縦〔長の向き〕ばかりじゃつまらないから横でも描いた。」

【#4】 7月上旬。時間になっても、待ち合わせ場所に来ない。筆者は辺りを探すがいない。20分ほどして近くのソファに座ってるAさんを見つける。<あ、ごめんなさい、気付かなくて>、「部屋にいらっしやらないのかと思って」。少し気まずい空気の中の1枚目は、幹線を左・右の順で下ろし、幹表面に少し荒く縦線を入れる。包冠線を2度描く。実を加え、樹冠領域に繁みを暗示する線を描く。「リンゴ」(A4-1)。2回目は、最初に細い幹線を左・右の順で下ろすが、次は太い幹線を重ねる。根元を整えて、包冠線を重ねながら左から描く。実は最後。「サクラランボ」(A4-2)。

【面接】 「まだ悶々としてる時ですけど。(前回から)1ヵ月くらい経ってるから、ちょっと復活してて。何を想って描いたか分からないんですけど、これ(幹上部

の枝分かれ)を描くと気持ち悪くなるからだと思うんですけど、微妙にやめたりやめなかったり(笑)。あとこの時は、卒論の構想発表会も一段落ついちゃったし。〔大学院に向けて〕勉強をしなくちゃいけないんですけど、なんかやる気が出なかったりっていうのは、ずっと。なんか悶々としてる感じがします。あと、これ(2枚目)は見上げないと届かないくらいの木を描いたのかなっていう。これを何mって言ったかは覚えてないんですけど。実は採れないんじゃないかっていう。<…5mでしたね。>「あー、なんか届かないですね。」

【#5】 8月上旬。少し考えてから1枚目、幹線を左・右の順で下ろし、包冠線を一度は荒く、次に重ねるように描く。実はここで描く。幹表面を上から暗している最中、幹線の右下を伸ばし、地面線を描いた後で、幹表面の描写へと戻る。「リンゴの木」(A5-1)。2枚目は用紙を自ら横長にし、幹線を重ねながら左・右を描き、さらに幹線を重ねる。左右の包冠線のモクモクを何度も上へと重ね、実を加える。包冠線にまた線を加えて終える。「ミカン」(A5-2)。

【面接】 「8月になったから頑張らないって思ったと思うんですけど(笑)、だからちょっと幹が太いのかなっていう。まあちょっと切り替えて頑張ろうと思ったのかな。あと〔幹表面の〕色を付けるかとか付けられないかとかは、たぶんその場のノリだと思うんですけど。なんかつまらないなって思ったら色を付けたりしてたんです。で、この〔樹冠部の〕葉っぱも、モクモクしてた方がいいなって思って。なので何回も重ねて描いたと思うんです。あと、また縦〔長の向き〕に飽きたと思うんですけど、って、デッカイ木を描いたのかなって思います。」

【#6】 8月下旬。1枚目の描き初めは早い。幹線を左・右と下ろし、包冠線を左から一度描き、包冠線の両側に更に描線を入れる。実は丁寧に描き入れ、地面線を加えてから、幹表面を下から上へと暗くする。「ブドウ」(A6-1)。2枚目は自ら用紙を横向きにし、幹線を左・右と下ろす。包冠線を左から描き、その後数度重ねる。数個の実を描いてから、幹頂部を分化させ、また実を加える。最後に地面線を描きながら、幹の根元も僅かに伸ばす。「梨の木」(A6-2)。

【面接】 「たぶんスーパーでブドウがあったので、ブドウでいいやって。ブドウがこんな木か知らないんですけど。…うーん、一人でいると結構悪い方に考えちゃう方なので、息抜きができたと思うんですけど。…でもはい、なんか途中から、こういう風に枝分かれさせると(樹冠の下に手のように伸びる枝)、なんか人っぽく見えるので、気持ち悪くなっちゃって、途中で描くのやめたんです。こっち(2枚目)は敢えてリンゴっ

表1 A の RIM 結果 (まとめ表: 片口法旧法による)

R (total response)	15	W : D		11 : 3	M : FM	8.5 : 2	
Rej (Rej/Fail)	(0/0)	W%		73%	F%/ΣF%	13/100	
TT (total time)	11'27"	Dd%		7%	F+%/ΣF+%	100/ 73	
RT (Av.)	1'09"	S%		0%	R+%	73%	
RiT (Av.)	10"	W : M		11 : 8.5	H%	47%	
RiT (Av. N.C.)	11"	E.B	M : ΣC		8.5 : 1.5	A%	33%
RiT (Av. C.C.)	9"		FM+m : Fc+c+C'		3 : 1.5	At%	0%
Most Delayed Card & Time	VII, 17"		(VIII+IX+X)/R		27%	P (%)	4 (27%)
Most Liked Card	III	FC : CF + C		1 : 1	Content Range	5 (12)	
Most Disliked Card	IX	FC+CF+C : Fc+c+C'		2 : 1.5	Determinant Range	6 (9)	
Self Image Card = IX, Father Image Card = V, Mother Image Card = VI, 兄 Image Card = II, 妹 Image Card = VII, 祖父母 Image Card = III							

ばいですけど、梨を描いたんです。それに最後だし、変化つけたいなって思って、こういう風に描いた。で、何を思ったか、手(幹上部の枝分かれ)が復活してるのはよく分かんないですけど(笑)。でこっち(1枚目)は幹を塗ったから、一緒じゃつまらないって思って、[2枚目は]地面を塗ったと思うんです。」

全体の感想については次のように語った。

「描き出したら全然平気って感じでした。飽き飽きはしなかったですけど、なんか自分の絵に飽きるっていうか、なんか代わり映えしない絵ばっかりだな、みたいなのはあったので。なので横[長の向き]にしたりとか。でも斜め[の向き]にする勇氣はなかったので(笑)。なんか明確に、パッと見て分かる果実を描きたかったので。なんとなく形が分かる果物は選びました。」
<1枚目と2枚目を、ご自身はどう体験しました?>
「とりあえず、実を変えようっていう感じで。2回リンゴは描かないでおこうっていうのはあったと思います。でも、結果的に同じ木ばかりになっちゃったなっていう感じだと思います。」

3.2 RIM の結果と理解

9月に実施したRIM結果は表1の通りである。特徴的な点は、M系反応の多さとF%の低さであり、質疑段階での語りが豊富なために副分類でスコアが増えることであった。

3.3 考察

#1の両バウムは形態がしっかりしている。進路および親との関係に心動かされていた時期で、Aは「あまり元気な木じゃない」と評す。もしかすると、彼女の受け取り方と1回目の幹表面の暗さとは関連があるかもしれ

れない。#2は、前回よりもタッチの少ないバウムである。幹上部の分化が「手に見え」と述べ、主体性や成長との関連が見える枝に、Aは拒否的な感情を持ったようだ。#3は「モヤモヤ」感が出てきた反動形成なのか、実を濃く描いている。横向きで描画を行う冒険心は、新たな領域での活動を模索した彼女の進路選択とも関係しているだろう。#4で「悶々」としていることは、樹冠内部の描線からも読み取れうる。「見上げないと届かない」という語りは、就職内定もなく、大学院受験が迫っている気持ちを言い表そうとしているのだろうか。#5で夏休みに入り、1枚目と2枚目の違いについて自ら説明される。#6が最後ということで、挑戦的にブドウと梨を描かれたのであろう。最後の振り返り面接時に、大学院受験は失敗し、改めて就職活動を行っている」と筆者は知った。

Aのバウムで一貫して認められる表現は、「実」「包冠線」「包冠線の波打つ描線」「根元の広がり」である。#4の2つの幹下縁立を地面希求的表現と見るならば、「地面」に関する表現も全バウムで暗示されている。したがって、これらはAにとって、描かれる必要性があった(描かざるをえない)表現、あるいは変えることが難しかった(可変性を欠く表現)、もしくは安定した(融通の利かない)部分、などと解せる。次に、変化があった表現は、「樹種・実の種類」「幹表面の描写」「上縁はみ出し」「幹上部の分化」「低在枝」「用紙の向き」であった。しかし、これらで変化が認められたとしても、Aの場合、バウムから受ける印象を然程変えはしないように思われる。すなわち、変化があった表現とは、Aにとって変えて自己の安定性を損なわない部分なのかもしれない。なお、大半のバウム対で、1枚目は幹が暗く塗られ、2枚目は輪郭線が重ねられている。このことは、Aには外界との摩擦を常に経験しており、それが形を変えて表

現されたと読むことができる。

RIM 結果を見る限り、A は内的な基準に拠って世界を体験する特徴がある。これは、#4 をめぐって「実は採れない」「届かない」とイメージを展開させる能力とも関わっているだろう。RIM において、形態規定性の低い「遊び」のある表現は多くはないが、CR と DR の高さから、自我のフレキシビリティが認められる。

4. B さんの表現シリーズ

4.1 バウムと振り返り面接

B は女性、大学 4 年生。体格は 160cm 半ばで細見。顔を合わせた時は笑顔で話をされたが、座って対面すると筆者には、対人関係での閉じた特徴が感じられ、芯が

通った人との印象も浮かんできた。回ごとのバウム表現 (5~8 月) と、それに対する振り返り面接 (9 月) を記述する。

【#1】 201X 年 5 月上旬。教示を伝えると悩む表情を見せるが、描き始めるとすぐに終わる。1 枚目は幹線を左・右の順で下ろし、幹上部左から樹冠をモクモク描いた後、実をならしてから、幹表面に線を入れる。「リンゴの木」(B1-1)。2 枚目も同じ描き描き順で「リンゴの木」(B1-2)。この時、自らを「てきとうな性格」と語る。以下、特に記さない限り、B は同じ描き順で描く。

【面接】 「うーん、ちょっと [2 枚のバウムは] 似てる (笑)。」 <…この時期はどうでした?> 「GW 前ですよね。就活の前、半ばだったと思うんですけど、

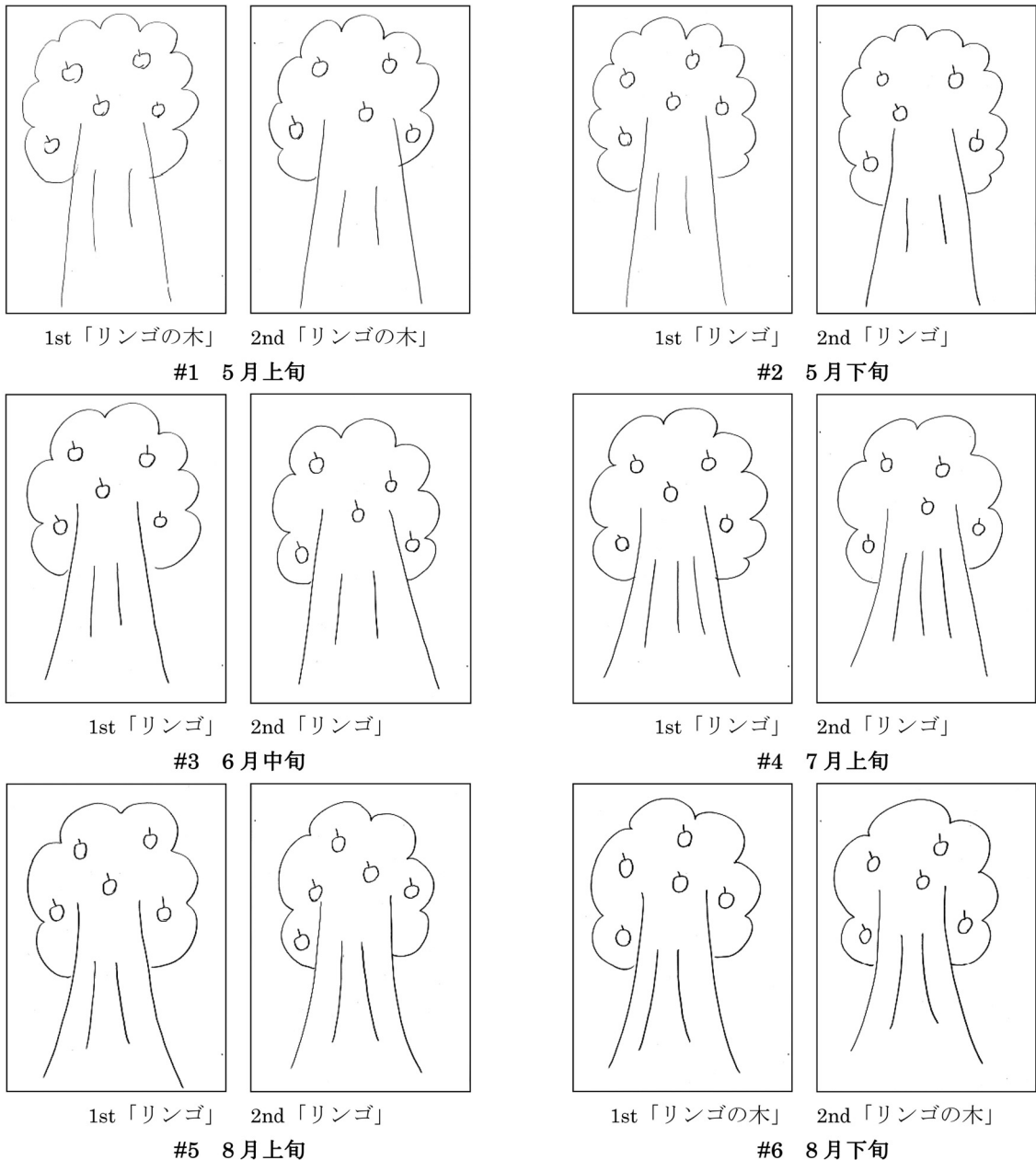


図2 Bのバウム・シリーズ

うーん、呑気にやってたかなと思います。そんなに焦ったりする性格じゃないので。」「自分でやれることは限られているので。それをやったら、結果がどうか、人の評価がどうかあまり気にしないので。就活が始まったからといって、自分の気持ちが変わったりとかは無いです。」

【#2】 5月下旬。1枚目（B2-1）も2枚目（B2-2）も同じ形で、どちらも「リンゴ」。2枚目は幹を形作った後で、すぐに幹表面に線を入れている。

【面接】 <次がこれですね（とバウムを提示）。> 「そうですね。これ（バウム）に関しては変えるつもりはもともとなかったですし、他のものが描けないので、まぁこれを描くしかないかって思って描いてたんですけど。今までを振り返ってみても、自分のを変えるっていうのはあまり好きじゃないので。」

【#3】 6月中旬。今回も1枚目（B3-1）2枚目（B3-2）ともにこれまでと同じ形で描く。どちらも「リンゴ（の木）」。あまりに同じ形態ばかりだったので、筆者はここで介入を試みた。これまでの6枚のバウムをCさんの前に並べて、これまでの調査の感想を尋ねると「あまり変えたくない」、「他のが描けないのもあるんですけど…」。

【面接】 …間… <これまで似た形を描いてられて、それが良い悪いっていうのは私の中にはないんだけど、もしかしたらご協力いただくのに、無理させてるのかなって思って。それでこれまでのを並べてお聞きしたのが、この3回目の後だったんです。> 「いや、そういうのは別にはないです。」「就活の試験は4月にもあったし、5月にもあったしっていう。何個も受けたので。」

【#4】 7月上旬。再び「リンゴ」（B4-1 & B4-2）。

【面接】 …間… <ここ（幹表面）が三本になってましたね。> 「あー、自分でも意識してなかったんですけど。なんでしょね。あまり変えてるつもりじゃなかったんで、自分でも初めて気付きました。」「就活でピリピリしなくなかったんで。無理して就職しようとはまでは思ってなくて。自分の受かる所だったら受かるし、合ってなかったら受からないと思ってたので。就職はやっぱり大事なんですけど、人が思ってるよりも、自分はどこでもいいと思ってたと思います。」

【#5】 8月上旬。再び「リンゴ」（B5-1 & B5-2）。就職活動について尋ねると、志望企業からの内定獲得を笑顔で話される。

【面接】 「はい、特には…。」

【#6】 8月下旬。再び「リンゴの木」（C6-1&C6-2）。2枚目は幹を形作った後に、幹表面に線を入れている。

【面接】 「そうですね、描きなれたかな（笑）。<線の運び方が落ち着いたかもですね。> 「はい。」
全体の感想についてはこのように語った。

「その、描いている木が同じだったので、〔調査のための〕結果はこれで出るのかなって思ってたんですけど（笑）。これで役に立ってるのかなって。まぁ、これくらいしかできることがないので。」<他の調査ではやってるんですが、もし"今までは違う木を描いてくれ"というお願いをしたら、どうです？> 「そうですね。実の種類を変えたりとかですかね。木のイメージがこういうのなんで、なかなか変えづらいですね。」

4.2 RIM の結果と理解

B の RIM 結果（9月）は表2に示した。特徴的な点としては次の2点であった。第一は、R および M 系・C 系反応の少なさであり、結果として EA（E.B.の M+Σ

表2 B の RIM 結果（まとめ表：片口法旧法による）

R (total response)	11		W : D	7 : 2	M : FM	0 : 0
Rej (Rej/Fail)	(0/0)		W%	64%	F%/ΣF%	64/100
TT (total time)	2'40"		Dd%	18%	F+%/ΣF+%	71/ 82
RT (Av.)	16"		S%	0%	R+%	82%
RiT (Av.)	11"		W : M	7 : 0	H%	18%
RiT (Av. N.C.)	14"	E.B	M : ΣC	0 : 0.75	A%	46%
RiT (Av. C.C.)	9"		FM+m : Fc+c+C'	0 : 2	At%	0%
Most Delayed Card & Time	IV, 23"		(VIII+IX+X)/R	27%	P (%)	2 (18%)
Most Liked Card	VIII		FC : CF + C	1.5 : 0	Content Range	5 (5)
Most Disliked Card	III		FC+CF+C : Fc+c+C'	1.5 : 2	Determinant Range	4 (4)
Self Image Card = X, Father Image Card = VII, Mother Image Card = IX, 妹 Image Card = II						

C) は低くなる。これと関係しているが、第二は、図版体験時に自らを投企しないという抑圧的な反応が多いことである。

4.3 考 察

B は全 12 枚のバウムテストを同じ「リンゴ」を描いた。彼女の中には極めて強固なバウム像があり、それを筆者の前で表現できる力と意志があるということであろう。調査中、一度筆者が介入を試みた (#3)。その明瞭な示唆に対しても、B は揺らぐことなく同じバウムを表現した。その表現を押し通した、ともいえる。#1 で「人の評価がどうかあまり気にしない」と B はいう。これは、言うは易し行うは難しで、なかなか貫徹できる態度ではない。この調査の構造自体に、表現がどう変わるかを知りたい、どんな表現ができるかを考えたい、という筆者の想いが映し出されているからである。B もこうした調査の意図を理解していたことは、「描いている木が同じだったので、〔調査のための〕結果はこれ出ることかな」(#6 の振り返り面接) から明らかである。そうした B は、調査の最中にしっかり内定先を得ている。

RIM からは心的エネルギーを多く表現しない、いわば抑制的な態度がうかがえた。それは自我の固さを示している。想像力をもって物事に対処せず、外界からの刺激の受け取りも最小限である。

5. 総合考察

5.1 2 名の表現シリーズから

様々なバウム像の描出を試みた A と、ほぼ同形のバウムを一貫して描出した B は、ある意味で対称的である。そこで両名の比較を行いつつ、改めて結果を考えてみたい。

第一に浮かんでくる仮説は、個人が表現できるバウムには限界があるということである。B はほぼすべて同形のバウムを描いた。A は様々なバウムを描いたが、どれも似た印象を読み手にもたらすものでもある。たとえば、A には描線を重ねやすいこと、幹から描く、幹の伸ばし方、幹の根本を広げること、モクモクした樹冠の描線である。そして、指標のような形では捉えられないが、ある種の個性が一貫性して A の表現シリーズには認められる。これは個人の描画の癖、言い換えれば、生き方の癖のようなものであろう。こうしたものは、枝を生やしたり画用紙の向きを変えたりなど、表面の窓口を変えようと試みても、変えることはできないようである。

以上のことから、こうした表現の個人的な幅を超えたバウムの変化を心理療法などの大きな効果として、あるいは変容として見ることは危険である。猪俣 (2017) が言う「かすかな移行」に心理療法における現象を見る意義もあるからである。つまり、バウムの変化の大きさだけに拘泥するのではなく、その表現の内実が、あるいは

内実に関するわれわれの仮説が問題になるのだと考えられる。

なお、奥田 (2019) のバウム表現は実に多種多様で、様々な顔を示す。これは、本対象者らの表現シリーズとは異なる特徴であるから、奥田のような表現の幅は、通常の大学生には存在しないのではないのだろうか。あるいは、臨床・研究といった経験がなければ、人はバウムの様相を大きく変化させる術を持たないのだと考えることができる。

第二は、バウムの形態が変わることと変わらないこととの二面性である。A はいろいろな表現を試みバウムの操作的变化を試みたけれど、進路に難渋した。一方、B は画一的ともいえる表現を続けたが、早い段階で内定を得た。このことは、偶然以外の観点で考察するに値するだろう。つまり、表現が変わることの明暗・変わらないことの明暗である。A の表現はポジティブな言い方をすれば、変化に富み、多面的に自己を表出する能力を感じさせ、拘りが少ないように見えるが、ネガティブな言い方をすれば、部分的にコロコロと移り変わり、不安定で、探索的である。一方、B の表現はポジティブな言い方をすれば、一貫性があり、安定していて、規則的であり、ネガティブな言い方をすれば、拘りが強く、融通が利かず、固すぎる。進路に関して A よりも B の方が結果をすぐに得たことには、バウム表現が変化しないことのポジティブな面との関係で理解できるかもしれない。これは抑圧的であることの強みとも解釈できる自己の安定性の結果である。

5.2 シリーズの意味と考え方

表現をシリーズとして読み取ることの重要性は、箱庭や風景構成法など、イメージを重要視する技法で夙に強調されてきた。本研究で得られたバウムからも、当たり前のことながら、同様の強調が可能である。バウムもまたシリーズとして捉えることで、記してきたように、A の表現も B の表現もより意味を見出すことができるからである。

このことはある意味、最初に臨床家の前で一枚のバウムが描かれた時、そのバウムの形態の意味を考えるだけでは不十分なことを示唆する。つまり、現れたバウム形態がどのような心理学的意味を表象し、現在や過去を表しているのかを理解しようとする姿勢がまずは重要であろう。ただし、それだけでなく、ある表現が、描線として現れなかったものも含め、これからどういった展開を見せるかについて、イメージを温めるかのようにコンテンツすることもまた重要となるのではないだろうか。その際は臨床家が抱く期待それ自体を省察する必要もある。

臨床家が抱く期待が過度に前景化すると、枝の無いバウムに「枝を生やさせる」という見通しを持つかもしれない。たとえば、枝をつけるようクライアントと励ますことは、イメージという言葉を使ったとしても、行動論

に基づく変容促進である。これにも有効性はある。ただし、真にイメージとして捉えていく上では、これはシリーズとして理解する際の副作用となる。クライアントを行動へと向かわせるよりもむしろ、枝が描かれなかったという事実とその内的現実を生きてこそ、深層心理学的には意味をもち、またそうした態度でバウムのシリーズを捉えてこそ、枝が生まれた時と生まれなかった時に、よりイメージ論としての意味を見出すことが可能になるはずである。

本稿は調査研究であるから、対象者らはクライアントではない。ただし、仮に両名のバウム・シリーズが学生相談の関わりの中でなされたものだと考えると、Aとはバウム形態の模索プロセスに、アイデンティティなり自己感覚の探求プロセスを見ることができると、そこに同伴する意味が、関わりにおいては重要となるだろう。Bの場合、彼女がそもそも来談するとは思えないけれども、大学卒業後の環境の変化（仕事や結婚など）において新たな自分へ向かうよう迫られる、との課題が予測できる。

時に検査所見の作成が求められる臨床領域において、2枚法や3枚法が用いられる。本調査でも、この複数枚法を採用した。複数枚法は、いわば超短期間のシリーズ表現であるが、上で論じたシリーズ表現の捉え方とは異なる。複数枚法は、描画場面を幾らか変えた時にクライアントがどう反応するかを見ることができると、バウムらに動きを見て、自我の対処方略を捉えることができ、結果、検査所見が書きやすい。まずは自我のフレキシビリティに着目することが、複数枚法の理解には適していると思われる。

6. おわりに

本研究は、非臨床群である大学生2名から得られた約4ヶ月間のバウム・シリーズの理解を試みた。そして、個人が表現しうるバウム像には限界があることを見出し、バウムのシリーズ的理解の意義を考察した。このことは、指標として表現できる表現形態の有無のみでは、われわれはバウムを十分理解することができないことを明らかにすることとなった。

謝 辞

本稿は日本ロールシャッフ学会第18回大会での発表を修正したものである。発表時に座長を務めてくださった高橋昇先生に感謝申し上げる。

文 献

猪俣剛「かすかな移行としての心理療法——ユング心理学から見た変容」『箱庭療法学研究』30巻2号, 15-25頁, 2017年。
奥田亮「100枚の日誌的バウム描画に関する考察——バ

ウムの描画体験の内観を通じて」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』9巻, 101-110頁, 2019年。
佐渡忠洋「バウムテストの主題が有する〈ゆらぎ〉の構造」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』13巻1号, 47-55頁, 2019年。